

## 偏差値が高く、かつ部活の実績もある高校のサッカー部の指導者の コーチング・メンタルモデル

### The coaching mental model of a high school football team coach which school has a high deviation score and also a track record in football

1K09B137-3      デュプス 恵実瑠 源  
指導教員 主査 堀野博幸 先生      副査 倉石平 先生

#### 【序論】

クラブチームなどではなく、通常の高등학교に通いながらその運動部に所属してスポーツを行う高校生にとって、そのスポーツを行うことはもちろんだが普段の学校生活、特に勉学の面においても一定以上の努力や取り組みをすることが求められると思われる。しかし、部活動が所属都道府県内で上位レベルであり、かつ偏差値が高い勉学の面も優れている高等学校(俗に言う進学校)のサッカー指導者についてのコーチング・メンタルモデルというところにアプローチした研究の報告は見当たらない。これが果たして勉学の面がスポーツの指導に影響を与えることは何もないと考えられているのか、あるいはただ単に今まで研究の着眼点として存在しなかったのかも不明確なため、本研究においてはそこの問題提起をする。加えて、実際に事例研究として下記に記す対象者に実際にインタビューを行い、そのインタビューで得られた回答をもとに質的研究を行い、最終的に当該指導者のコーチング・メンタルモデルを作成したうえでそこにどのような特徴がみられるのかを明らかにすることを目的とした。

#### 【方法】

##### 1. 対象者

- 1) 過去3年間で当該高校サッカー部で都道府県大会ベスト4以上の経験をしていること
- 2) 当該高校の偏差値が70以上であること

##### 2. データ収集方法

本研究では、北村(2005)の先行研究を参考に、指導者の指導行動がどのような哲学、理念、知識、価値観によって生起するのかを深層的に明らかにするために、1対1の半構造的インタビューによりデータ収集を行った。

#### 【結果】

指導者Aは、「サッカー文化の発展」を一番考えた上で、現場の指導では環境づくりを重要視し、そしてそのためにも現状把握をすることによって具体的な方針が決まるとしている。最も上にある目標としてサッカー文化を考えているため、最終

的にそこに全てが繋がるものと考察された。

指導者Bは、「勝利」することを指導の最上の目標としており、そこにたどり着くための支援などが必要不可欠になることから「社会性の獲得」が、そしてそれを成し遂げるために「総合的な評価」をもって選手を評価していることが明らかになった。

#### 【考察】

##### 1. 主軸となる部分

指導者Aのコーチング・メンタルモデルから得られた結果では、指導者Aの指導の主軸にあるものは「サッカー文化の発展」ということが明らかとなった。対して指導者Bのコーチング・メンタルモデルから得られた結果では、「勝利」を主軸に置いていることが明らかとなった。このことから、両者の指導の主軸となる部分に共通した傾向はないと言える。

##### 共通してみられた部分

どちらも普段の学校で指導していることと部活の場面で指導していることが違うようなことはないことや、現状与えられている学校の環境に合わせた指導を行っているといった程度の共通項はみられた。しかしながら、この二点以外では特筆すべき共通項などはなく、むしろ主軸の部分では「サッカー文化の発展」と「勝利」と別々のものに分かれたため、本研究で最初に掲げた偏差値の高さと部活の実績を両立している指導者としての共通傾向はないものと考えられる。

これが対象とした2名がたまたまそうであったか、それとも対象人数を増やしていくことによって特定の傾向が見えてくるのかは、現時点では不明である。本研究はあくまで今後の研究の先駆けとなるための事例研究の1つであり、偏差値が高く、かつ部活の実績もある高校の指導者の一般的、普遍的なメンタルモデルが明らかになったとは言えない。

しかしながら、今まで明らかにされなかった観点からの指導者のメンタルモデル構築は有意義であったと言える。本研究が今後のコーチング・メンタルモデル研究の一助となることを願い、今後の研究に期待することとする。